

## 12月号の主な記事:ユース・アメリカ・グランプリ2011日本準決選

今月号の日本語ページは、10月14～20日にかけて品川きゅりあんで開催されたユース・アメリカ・グランプリ(YAGP)2011日本準決選のレポートです。

YAGPの日本準決選は、過去3年間は尼崎で行われてきました。今回開催地を東京に移したことについて、YAGPの設立者であり監督を務めるアリッサ・サヴェリエフは、「三年の間に西日本の有望な若手を、発掘しつくしてしまったから！」と、ユーモアを交えつつ得意げに語ります。

アリッサや事務局にとって、新天地での結果はまずは満足のいくものだったようです。これまで日本準決選では、二年続けてプロのカンパニーから契約のオファーを受ける参加者が出ていましたが、今年は湯沢奈乙美に香港バレエ団から正式入団の打診があり、三年連続しての快挙となったからです。湯沢は過去にもこのコンクールに出場し、ニューヨーク決選に進んでヒューストン・バレエ学校で奨学生として学びました。しかしアメリカでの就労ヴィザが下りず、再びこのコンクールの門を叩いたのです。今回はアンサンブル部門で『パリの炎』パ・ド・ドゥを踊り(パートナーは昨年度シニア男子第一位で、今春のニューヨーク決選後にモスクワ音楽劇場バレエと契約した宮川新太)、晴れてプロの世界に迎え入れられました。

今年は、特にジュニア女子に優秀な参加者の多い年という印象を受けました。二百五十人を超える中から第一位に選ばれたのは、クリーンで可愛らしいオーロラ姫のヴァリエーションを踊った佐藤理央。そして、シニア部門では第一位、第二位はともに『エスメラルダ』のヴァリエーションを踊っての受賞でしたが、アリッサはこうした技巧的な課題曲をジュニアやプリ・コンペティティヴ部門の子供たちが選ぶことに対しては、強い遺憾の意を表明しています。

「課題曲の選択は指導者の責任ですが、すべての参加者は“年齢相応”の曲を選ぶべき。これは、声を大にして言いたいことですね。まだ小さいうちから、プリマ・バレリーナのための踊りである黒鳥のパ・ド・ドゥなんてやらせてはいけません。キューピッドやフロリナなど、年齢にふさわしいヴァリエーションはいくらでもあるのに、十一歳でエスメラルダなんて噴飯物です！」

アリッサと、アメリカのワシントンDCにあるアメリカン・バレエ・シアター・ジャクリーン・ケネディ・オナシス・バレエ・スクールの校長であるフランコ・デ・ヴィータは、早すぎるポワント・シューズの使用(アメリカ等でも散見されますが、とりわけ日本で顕著な傾向です)についても、揃って懸念を示しています。身体の引き上げがしっかりできていないうちからポワントを履き始めると、成長期の身体に取り返しのつかないダメージを与えることにもなりかねません。

そうした中、YAGP開催のしばらく前に審査員から受けたアドヴァイスを受け入れ、ただ一人バレエ・シューズで参加した根岸美風の決断は、勇気あるものといえるでしょう。ドゥミ・ポワントでの彼女の踊りは身体の各部がしっかり使えていて、ポーズも美しく構成された印象を与えました。見事トップ12に残って来春のニューヨーク行きの切符を手にしたことに、心から拍手を贈りたいと思います。

(英文記事執筆/日本語訳:長野由紀)



オーロラ姫を踊る佐藤理央 Photo: Hideaki Tanioka